

2020年6月28日(日)「時の管理者」

《聖書協会共同訳》コヘレト 3:1-11

- 1 天の下では、すべてに時機があり、すべての出来事に時がある。
- 2 生まれるに時があり、死ぬに時がある。
植えるに時があり、抜くに時がある。
- 3 殺すに時があり、癒やすに時がある。
壊すに時があり、建てるに時がある。
- 4 泣くに時があり、笑うに時がある。
嘆くに時があり、踊るに時がある。
- 5 石を投げるに時があり、石を集めるに時がある。
抱くに時があり、ほどくに時がある。
- 6 求めるに時があり、失うに時がある。
保つに時があり、放つに時がある。
- 7 裂くに時があり、縫うに時がある。
黙すに時があり、語るに時がある。
- 8 愛するに時があり、憎むに時がある。
戦いの時があり、平和の時がある。
- 9 人が労苦したところで、何の益があろうか。
- 10 私は、神が人の子らに苦労させるよう与えた務めを見た。
- 11 神はすべてを時に適って麗しく造り、永遠を人の心に与えた。だが、神の行った業を人は初めから終わりまで見極めることはできない。

《新改訳 2017》伝道者の書 3:1-11

- 1 すべてのことには定まった時期があり、天の下のすべての営みに時がある。
- 2 生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。
植えるのに時があり、植えた物を抜くのに時がある。
- 3 殺すのに時があり、癒やすのに時がある。
崩すのに時があり、建てるのに時がある。
- 4 泣くのに時があり、笑うのに時がある。
嘆くのに時があり、踊るのに時がある。
- 5 石を投げ捨てるのに時があり、石を集めるのに時がある。
抱擁するのに時があり、抱擁をやめるのに時がある。
- 6 求めるのに時があり、あきらめるのに時がある。
保つのに時があり、投げ捨てるのに時がある。
- 7 裂くのに時があり、縫うのに時がある。
黙っているのに時があり、話すのに時がある。
- 8 愛するのに時があり、憎むのに時がある。
戦いの時があり、平和の時がある。
- 9 働く者は労苦して何の益を得るだろうか。
- 10 私は、神が人の子らに従事するようにと与えられた仕事を見た。
- 11 神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠を与えられた。しかし人は、神が行うみわざの始まりから終わりまでを見極めることができない。

【序論】

「時間」という概念を持つことは、人間であることの最大の特徴の一つです。たしかに、他の動植物も本能によって時の流れや季節のサイクルを意識して生きています。それは時として、人間よりも精巧である場合さえあるでしょう。しかし、数学的に一年を365日／12ヶ月とし、一週間を7日に分け、一日を24時間で区切り、一時間を60分とし、常に時計と睨めっこしながら生きているのは人間だけではないでしょうか。私は子どもの頃、飼っていた猫に時間の概念を教え込もうとしたことがありますが、途中で諦めました。時間概念を持つことは、「時を管理する責任」と言えましょう。それは、人間が地の管理者とされていることの証であり、同時に人の有限性を表す最たる領域でもあります。「時間」という枠の中に押し込められた存在であるということは、人生には一定の定めがあることを常に目の前に突きつけられているようではありませんか。「お前は有限なる存在なんだよ」「限られた時間の中で考え、判断し、自分の分をやり遂げなさい」と言われているかのようです。事実、人生にはいつか終わりが訪れるのであり、それに抗うことは誰にもできません。

【本論】

今日からコヘレト3章に入ります。前回扱った2:24-26より、神の存在が見え始めました。一見無機質に廻り続けている世界ですが、そのすべての営みの背後には神がおられるという話になってきます。今日の箇所、神は「時を支配する方」として登場します。

本論1. 「天の下」の「時」

天の下では、すべてに時機があり、すべての出来事に時がある。(3:1)
ここには「時機」と「時」という二つの表現が出てきます。言葉の整理をしておきますと、「時機」(יָמָה／ゼマーン)と訳された言葉は「定められた時」「決められた時間」などという意味であり、「時」(עֵת／エース)には「(何かが起こる)時」「経験」「運命」「出来事」「機会」などの意味があります。「時機」という日本語は「あることをするのに適した時」という意味ですから、原語本来のニュアンスをよく捉えています。コヘレトは両方の言葉を使うことによって、「神が定めたすべての物事の時」というイメージを伝えようとしているのでしょう。

また、ここではこれまでに何度か出てきた「太陽の下」（神なしに廻り続ける無機質な世界）という言葉ではなく、「天の下」という表現が用いられていることも重要です。両者は似て非なるものであり、「天の下」は「目に見えない神の支配」を巧みに表しています。つまりコヘレトは、人類の営みのすべてには神によって定められた時と目的があるということを言おうとしている。この「神がおられる」という世界観に立って人生のすべての営みを見ていくこととなります。2～8節には14組の対句（正反対の物事）が並べられていますが、7は完全数であり、人間の活動の全領域をカバーするものとしてこの数が設定されたと思われます。私たちの全生活が神の支配下にあることを、コヘレトは表現しようとしている。そのような観点で対句の内容を確認してまいりましょう（説教の工夫として、各対句を三行で説明してみます）。

本論 2. 14 の対句

生まれるに時があり、死ぬに時がある。（3:2a）

生まれることと死ぬことは、人生最大の重要事。一体誰が自分の意志で生まれてくるでしょうか。死の時がいつであるかも私たちには知らされておらず、それは神の御手の中にあります。

植えるに時があり、抜くに時がある。（3:2b）

植えることと抜くことは、農耕の営みを指す表現でしょう。作物は定まった時期にすべきことがある。いつ耕し、いつ種を蒔き、いつ収穫するか、そのタイミングを逃しては豊作を望むことはできません。

殺すに時があり、癒やすに時がある。（3:3a）

殺すことは、第一に合法的な死刑のことが言われているかもしれませんが、続く「癒やす」という表現と関連づけるならば「病原菌を殺す」というニュアンスでも捉えられそうです。病が癒される「時」というのも、人間には定めることができません。

壊すに時があり、建てるに時がある。（3:3b）

壊すことと建てることは、建物に留まらず、王座や王国を表す場合もあるでしょう。新しいものが建てられるとき、古いものは崩されなくてはなりません。神の御心に適わぬものは、時が来ると崩され、新しいものにとって替えられる。

泣くに時があり、笑うに時がある。（3:4a）

喜怒哀楽もまた人間特有の感情ですが、その内面生活さえも神の御手の中にあるということです。ある感情が出てくることによって、何らかの気づきを与えられることが多いでしょう。自分の内側から出てくるものさえ、私たちにはコントロールできない。

嘆くに時があり、踊るに時がある。(3:4b)

嘆きとはお葬式、踊るとは結婚式を指します。これら二つの営みもまた、私たちの人生にたびたび訪れるものですが、「幸と不幸」の対極が存在することが分かります。出産によって新しい命が生まれることと、死によって失われることの表現とも言える。

石を投げるに時があり、石を集めるに時がある。(3:5a)

いくつかの解釈がありますが、ここではおそらく、石を投げるとは軍事的に侵攻すること（古代においては、畑に石を投げて土地を荒らし、不毛の地にするという戦略が立てられた）、石を集めるとは征服者のために道を整えることを指しているでしょう。

抱くに時があり、ほどくに時がある。(3:5b)

新改訳 2017 では「抱擁するのに時があり、抱擁をやめるのに時がある」と訳されています。抱擁するとは平和協定を結ぶこと、抱擁をやめるとは軍事作戦に移ることを指しているでしょう。個人的な人間関係にも置き換えられる。

求めるに時があり、失うに時がある。(3:6a)

財産や所有物を集める時と失う時のことが言われています。多くのものが与えられることでもあります。一瞬にしてすべてが取り去られてしまうこともある。まさしくヨブはそのような経験をし、財産とは神の御手の中にあることを知ったのです。

保つに時があり、放つに時がある。(3:6b)

6節後半部分も前半とほぼ同じことが言われています。しかし、前半では所有物に関して受動的な感じがしていたところ、後半にはやや能動的なイメージが置かれています。人生には所有物を手放すべき時があり、それも神が示されるのだと。

裂くに時があり、縫うに時がある。(3:7a)

衣服を裂くことは悲しみの表現、縫うことは悲しみが去って回復に向かうことの表現などと説明されます。あるいは、物事を諦めるべき時と、努力を続けるべき時が対比されているか。

黙すに時があり、語るに時がある。(3:7b)

物事には黙っているべき時があり、ここぞという時に語るべき瞬間があります。それは知恵によって判断されます。そのタイミングを見極めることは重要であり、私たちの人間関係がどう構築されるかを決定づけるものでもあります。

愛するに時があり、憎むに時がある。(3:8a)

人間にとって愛憎の感情ほど強いものはありません。誰かを愛した分だけ、裏切られたときの憎しみは大きくなる。私たちが誰かと出会い、愛することも、憎むことも、実は神のご計画の下にあるというのです。

戦いの時があり、平和の時がある。(3:8b)

これは、「愛すること」と「憎むこと」を国際レベルにまで広げた表現でしょう。フランシスコ会訳では「**戦争の時があり、和睦の時がある**」とされています。良い時代に生まれるも、悪い時代に生まれるも、人には選択することができません。

本論3. 人は永遠を意識するがゆえに、理解がどこまでも不十分であり続ける

以上、14 の対句を説明してまいりましたが、改めて私たちの人生の営みのすべてが神の「聖定」の下にあるということを考えてみたいと思います。コヘレトの見解によるならば、今私が本書から説教をしていることも、それを聞いている皆様がおられることも、神の支配の下で行なわれているということになるでしょう。今夜何を食べるかも、誰と誰が結婚するかも、いつ死ぬかも、神は一切を計画しておられ、人間はその道を辿っていく。しかし、ここには人間の自由意志の問題との難しいバランスがあります。私の解釈では、人間が自由に考え行動することと、神が永遠の昔に計画を立てられたことは、全知全能なる神の中では相対立しないのです。神が三位一体なるお方であり、一人であることと三人であることが同時並行で進み成立しているように、神の聖定と人間の自由意志は同時的に進んでいく。人には分からないことが、神には分かっている。それはまったく矛盾するものではないのです（二律背反／独 Antinomie）。このような観点から9節を読んでみると、その雰囲気は必ずしも悲観的ではないことが分かってきます。

人が労苦したところで、何の益があろうか。（3:9）

文字通りに読めば、「何をしたら神の計画に沿って進むだけなんだろう？」という運命論的な諦めに聞こえますが、より深くこの言葉を捉えるならば、人間が労苦することや楽しむことは、自分では主体的に動いているようではあるけれど、実は背後におられる神の御手の中にあると「神の主権を認める」言葉としても聞こえてきます。人間は「時間」を定め、時計を作りました。しかし、それは定められたサイクルがあることを見出し、それを分析した結果に過ぎないのです。では、そのサイクルを定めたのは誰か。神であるという論理であります。

私は、神が人の子らに苦勞させるよう与えた務めを見た。（3:10）

創世記3章以来、人間は労苦して糧を得ながら歩んできています（創世 3:17-19）。この労苦は、時間の中で生きる人間に時間を管理する務めをお与えになったと言い換えてもよいでしょう。時が流れている。その流れに逆らうことはできず、それに沿ってなすべきことを懸命に果たしていく。それが、「人生」を俯瞰的に眺めたときに気づく私たちの一生なのだ。このコヘレトの人生観は、読者次第でいずれの読み方に進むこともできるでしょう。諦めて「空しいもの」と捉えるか、神の御手の中にある安心感に浸るか。

神はすべてを時に適って麗しく造り、永遠を人の心に与えた。だが、神の行った業を人は初めから終わりまで見極めることはできない。(3:11)

ここには著者の複雑な心理が現れています。神が計画し行なわれることは、すべて「時に適って」おり「美しい」ものなのだ。人間の目に「悪」と映る事柄さえも、やがてはピタッとパズルのピースが埋まるように、一枚の芸術作品を仕上げていく要素となる。私たちの人生とは、無限に続く神のパズルの一ピースのようなものなのでしょう。人はその完成した姿を見たいと願う。それはつまり、神の御心を知りたいということです。神はたしかに人間にそのような思いをお与えになった。それが「永遠¹を人の心に与えた」という事柄の意味です。しかし、現時点では人には見せていただくことができない。分からないことだらけでこの人生を終えていくことになる。この事実¹に絶望するか希望を見出すかは、読者次第なのです。

【結論】

コヘレトは複雑な物言いをしてはいますが、言外に読者に伝えようとしていることがあります。それは、すべての営みは神の永遠の計画と支配の下にあるのだから、神を畏れ、神に従い、神に信頼して歩めばよいというメッセージです。分からないことはたしかにたくさんある。しかし、あなたの人生は神の大切なご計画の一部であることに間違いはないのですよ。あなたの人生には時間が与えられている。その時間をどのように管理して生きていきますか？神に与えられた時間を神のために用い、神のために管理して歩んでいこうではありませんか。そんな勧告が聞こえてくるようです。

【祈り】

時間の外側におられる神よ。私たち有限なる人間には、時が定められており、誰一人それを動かすことはできません。与えられた時間の中でどう生きるか、そのことが問われております。いつか主のご計画と地上の出来事のすべての意味が明らかにされる日が来ることでしょう。そのことを信じて、地上の人生を精一杯歩みます。私たちの「時」を、まことの「時の管理者」であるあなたにお返しします。

¹ 「永遠」と訳された「**אָוונ**／オーラーム」という言葉には、「長い継続（期間）」「古代」「後世」「永続」「継続的経験」「永遠」などの意味があります。この箇所では「永遠」と捉えると意味が通りやすくなるでしょう。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

人を有限なる存在として造り、ご自身の聖定の下にその人生を導き給う、父なる神の愛、永遠なる神が人となり、時の支配の下にその生涯を全うし給うた、主イエス・キリストの恵み、

「時の管理者」として定められた身分を受け入れ、その全権を神に返させ給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。